



明治学院大学

# シラバス執筆ガイド

Syllabus Creation Guidelines

# はじめに

副学長(FD 担当) 竹尾茂樹

2019 年度に教務システムを更新することに伴い、シラバスシステムも見直すことにしました。現行のシラバスシステムの欠点として、項目ごとの文字数制限が指摘されていたため、今回は基本的に文字数制限無しで書き込めるように変更を行いました。更に何度でも推敲できるように「一時保存」機能も付加しました。

2022 年度に受審予定の第三期認証評価や今後の大学設置基準の改正も考慮し、「身につく能力」、「授業言語」、「アクティブ・ラーニング」、「(予習復習の) 目安時間」を新たに項目として追加しました。これらは授業内容がさらに見えるように、また内部質保証のための措置ですが、何よりも履修した学生自身が授業や授業外学習(予習と復習)で、どういう能力が身につくのかを明確化することが目的です。

従来の授業は、学生に何を教えるかという「知識授与型」のものが中心でしたが、今後は、学生が具体的にどんな能力を身につけることができるのかが重要視されます。この観点から授業形態に関わらず、学生に主体性を持たせる授業設計のために、シラバスは基本的な情報であり、最大限に活用すべきツールです。

この度、シラバス執筆ガイドを制作し、項目ごとに執筆のポイントをまとめました。シラバス執筆時のみならず、授業設計の際に折に触れてご参照いただければ幸いです。

## CONTENTS

シラバス作成の前に	2
1 シラバスの定義と役割	3
2 教育目標、DP、CPとシラバスの連動	4
3 身につく能力	5
シラバス作成のポイント「DPと連動した授業デザイン」	6
1 授業概要	7
2 到達目標	8
3 アクティブ・ラーニング	10
4 授業計画(含む予習・復習の指示と目安時間)	12
5 授業に関する注意事項	14
6 教科書、参考書	14
7 成績評価の基準	14
付録	
1 シラバス・チェックリスト	15
2 用語集	16

## シラバスの掲載項目と執筆の要・不要

執筆の要・不要	シラバス掲載項目	
デフォルト表示	授業コード	
デフォルト表示	授業開講年度	
デフォルト表示	授業形態	
デフォルト表示	授業名称	
デフォルト表示	テーマ	
デフォルト表示	科目名	
デフォルト表示	英字科目名	
デフォルト表示	身につく能力	
デフォルト表示	科目単位数	
デフォルト表示	履修期	
デフォルト表示	教員氏名	
デフォルト表示	開講キャンパス	
デフォルト表示	曜時	
必須入力	授業概要	⇒詳しくは P.7
必須入力	到達目標	⇒詳しくは P.8
選択必須	授業言語	
選択必須	アクティブ・ラーニング	⇒詳しくは P.10
必須入力	授業計画	⇒詳しくは P.12
必須入力	授業に関する注意事項	⇒詳しくは P.14
必須入力	教科書	⇒詳しくは P.14
必須入力	参考書	⇒詳しくは P.14
必須入力	成績評価の基準	⇒詳しくは P.14
任意入力	関連 URL	
任意入力	備考	
任意入力	添付ファイル	
任意入力	添付ファイルの注意事項	
デフォルト表示	更新日時	

必須入力	必ず教員による入力が必要な項目
選択必須	表示されている選択肢のいずれかを選ぶ必要がある項目
任意入力	教員による任意の入力が可能な項目
デフォルト表示	予めシラバスシステム上に記載内容が表示される項目で編集不可



## Syllabus Creation Guidelines

# シラバス作成の前に

シラバスを作成する前に、ここではシラバスの定義と役割、教育目標、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、また「身につく能力」について解説します。

### CONTENTS

作成の前に   その1   シラバスの定義と役割	3
作成の前に   その2   教育目標、DP、CPとシラバスの連動	4
作成の前に   その3   身につく能力	5



## シラバスの定義と役割

シラバスは一般に次のように定義されています。

### 【シラバスの定義】

各授業科目の詳細な授業計画。一般に、大学の授業名、担当教員名、講義目的、各回ごとの授業内容、成績評価方法・基準、準備学習などについての具体的な指示、教科書、参考文献、履修条件等が記されており、学生が各授業科目の準備学習などを進めるための基本となるもの。また、学生が講義の履修を決める際の資料になると共に、教員相互の授業内容の調整、学生による授業評価等にも使われる。

中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（2008）

ここで示されているように、シラバスは教員にとっては「授業計画」のことを指しますが、学生にとっては授業選択のための資料にとどまらず、学習の意欲や効果を高めることにも寄与しています。また、佐藤浩章 編「大学教員のための授業方法とデザイン」（2010）の中ではシラバスの役割として次のように8つ挙げられています。

### 【シラバスの役割】

- ①学生が授業を選択するためのガイド
- ②教員と学生が交わす契約書
- ③学生の学習効果を高める文書
- ④教員と学生の人間関係づくりのツール
- ⑤授業の雰囲気を伝える文書
- ⑥授業全体をデザインする文書
- ⑦カリキュラム全体に一貫性をもたせる資料、質保証のための証拠書類
- ⑧教員の教育業績のエビデンス

佐藤浩章 編「大学教員のための授業方法とデザイン」（2010）

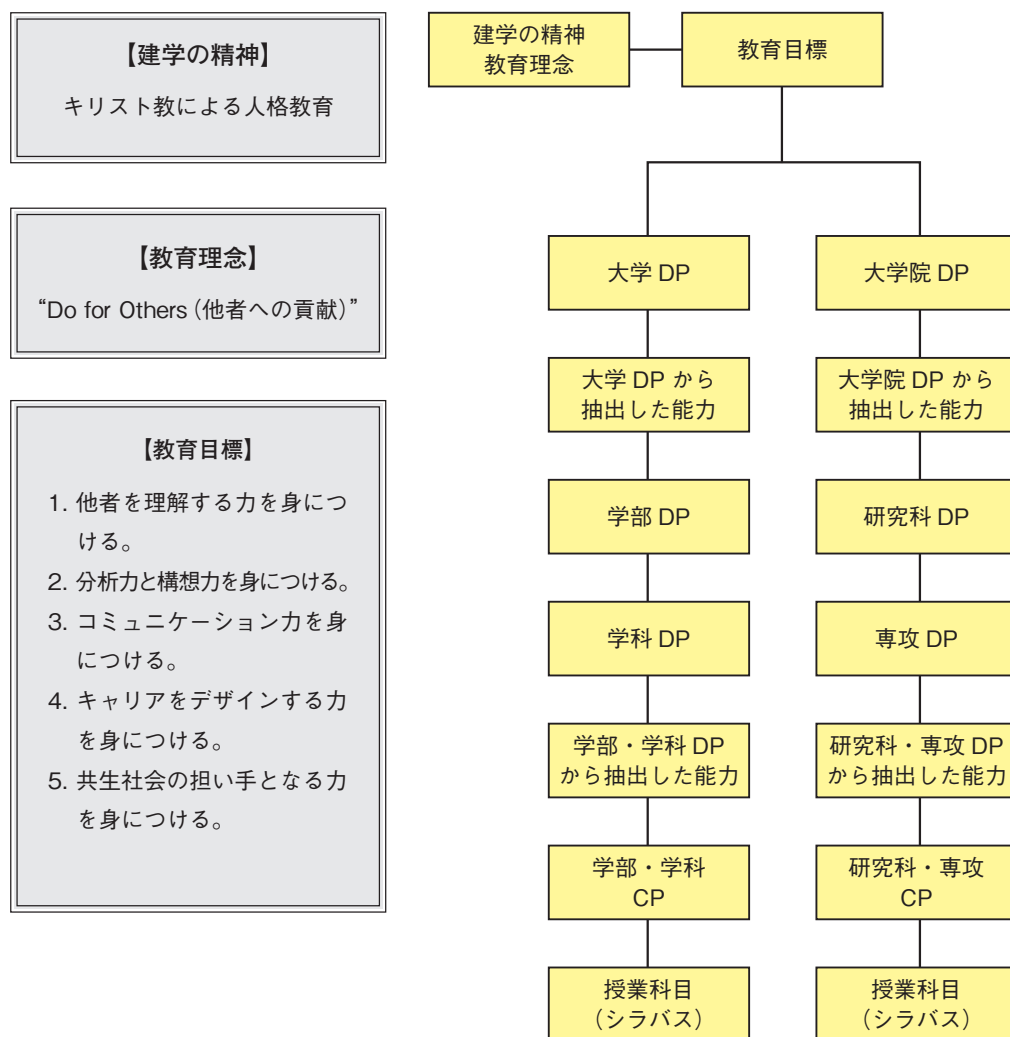
近年、シラバスは、大学教育の質保証の観点から、あるいは認証評価の際にも、その重要性が指摘されています。しかし、シラバスの本義は学生の能動的な学習を促すことにあります。授業の進め方や到達点を示し（**⑥授業全体をデザインする文書**）、学生が授業の内容を理解して選択しやすくすることで（**①学生が授業を選択するためのガイド**）、学生の学ぶ意欲を高める（**③学生の学習効果を高める文書**）ものなのです。シラバスは、いわば登山者を山頂へと導く「道案内」のように、学生の学びを頂へと誘うものと言えるでしょう。



作成の  
前に >>>  
その **2**

## 教育目標、DP、CPとシラバスの連動

「建学の精神・教育理念」「教育目標」を受けて各学部学科・各研究科専攻の「ディプロマ・ポリシー(DP)」「カリキュラム・ポリシー(CP)」が定められています。これらのことと授業科目は有機的な連関を持っていますので、その意義を踏まえて各授業科目のシラバスを作成してください。これらの関係を図示すると、次のようになります。



**【建学の精神】**  
キリスト教による人格教育

**【教育理念】**  
“Do for Others (他者への貢献)”

- 【教育目標】**
1. 他者を理解する力を身につける。
  2. 分析力と構想力を身につける。
  3. コミュニケーション力を身につける。
  4. キャリアをデザインする力を身につける。
  5. 共生社会の担い手となる力を身につける。



作成の  
前に >>>

その **3**

## 身につく能力

中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」(2008)において、学士課程修了時に身につく能力を「学士力」として示しており、本学では「学士力」を参照しつつ、本学の DP から抽出した「身につく能力(能力要件)」を次のように整理しています。

学士力に関する主な内容 (中教審)	本学で定める身につく能力
(1) 知識・理解 専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解(多文化・異文化に関する知識の理解、人類の文化・社会と自然に関する知識の理解)	(1) 知識・理解 ・歴史、文化、社会、自然、健康に関する幅広い教養 ・専門分野に関する基本的知識と体系的理解
(2) 汎用的技能 知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能(コミュニケーション・スキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力)	(2) 汎用的技能 ・知識を獲得するための技能・応用能力 ・知識を活用するための技能・応用能力
(3) 態度・志向性 自己管理能力、チームワーク・リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力	(3) 態度・志向性 ・主体的行動力 ・社会的責任感・倫理観 ・他者との協調力・共生力
(4) 統合的な学習経験と創造的思考力 獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力	(4) 統合的な学習経験と創造的思考力 ・知識・技能・態度などを総合的に活用する課題発見力 ・知識・技能・態度などを総合的に活用する問題解決力

本学では、大学の定めた「身につく能力」のほかに、各学部学科および各研究科専攻の DP から抽出した「身につく能力」に沿って「授業科目の能力要件表」を作成し、2019年度より履修要項、大学院要覧に掲載します。

シラバスの入力画面には、授業科目毎の能力要件が表示されますので、シラバスを作成する際には、専門知識や技能の修得だけでなく、この「身につく能力」を育成するための授業デザインを心がけることが肝要です。また、「身につく能力」の表記については、次のような3段階で表示されます。

◎=科目に最も関連する能力    ○=科目に関連する能力  
無印=この科目では比較的関連のない能力



## Syllabus Creation Guidelines

# シラバス作成のポイント 「DPと連動した授業デザイン」

ここからは、実際にシラバスを作成する際に、執筆に必要な項目です。ここでは、そのなかで特に留意していただきたいものをピックアップしています。

1～7の項目はすべて「必須」事項です。

## CONTENTS

作成の POINT 1   授業概要	7
作成の POINT 2   到達目標	8
作成の POINT 3   アクティブ・ラーニング	10
作成の POINT 4   授業計画 (含む予習・復習の指示と目安時間)	12
作成の POINT 5   授業に関する注意事項	14
作成の POINT 6   教科書、参考書	14
作成の POINT 7   成績評価の基準	14



POINT

1



## 授業概要

- 授業概要は授業の「目的」について説明します。学生から「この授業科目では何が学べるのか？」と質問されたときに回答する内容です。「この授業を受ければこんなことができるようになる」ということを記します。

- 「目的」は必ず学生を主語にして記述してください。  
例…「現在、国際社会では〇〇が問題となっているが、～この授業では、こうした現状を踏まえその解決に寄与する◎◎について学ぶ。」

- 「目的」を記述する際に使用する動詞の例

修得する／身につける／理解する／創造する／位置づける  
／価値を認める／知る／認識する 等

(出典 日本医学教育学会 2006)

- 授業概要は、わかりやすく、具体的に記載します。抽象的・専門的な用語はなるべく避けてください。
- 授業概要を記述する際には、授業で「身につく能力」の修得も意識して記述してください。その際、「[2 到達目標](#)」の例を参考にしてください。



POINT

2



## 到達目標

- 授業概要で示された「目的」を具体的に実現させる「到達目標」を明示してください。なぜなら、「到達目標」が「成績評価の基準」と連動しているからです。

こうした考え方は「逆向き設計」と呼ばれます。今までは「教えた内容を評価する」というように教える内容が先に考えられてきました。しかし、学生がどのようなことができるようになったのかという「質保証」が求められるようになると、何ができるようになるかという「到達目標」を定め、それを評価する「評価基準」をあらかじめ示したうえで「カリキュラムや授業」を設計し実践するという考え方が必要となりました。

### 【逆向き設計の発想】

① ゴール（教育目標：どんな能力を身につけさせるか）



② アセスメント（測定方法を考える）



③ カリキュラム設計・実践（何をどう教えるか）

(Wiggins, G. & McTighe, J. 「理解をもたらすカリキュラム設計—「逆向き設計」の理論と方法」2012)

具体的には次のことに留意してください。

- 目標は観察可能（＝評価可能）な行動を具体的な動詞を使って表現してください。
- 1つの文章に1つの目標にしてください。複数の目標があると達成度測定が困難になります。
- 知識・理解については、「○○について説明できる」「○○と□□の関係について説明できる」など、テストで評価できる記述にしてください。
- 汎用的技能については、「○○の知識を用いて□□の課題を解決できる」「△△の技能を活用して□□ができる」など、試験等で観察可能な記述にしてください。
- 態度・志向性については、「○○に主体的に取り組むことができる」「仲間と協調して○○することができる」など、観察評価できる記述にしてください。
- 統合的な学習経験と創造的思考力については、「○○の知識と技能を総合的に活用する□□の問題を解決できる」など、期末試験やレポートで総合的に評価できる内容を記述してください。

到達目標を記述する際には、次の例を参考にしてください。

到達目標	動詞の例
知識・理解	列挙する／述べる／推論する／記述する／説明する／分類する／比較する／対比する／類別する／関係づける／予想する／具体的に述べる／結論する 等
汎用的技能	測定する／実施する／模倣する／熟練する／工夫する／触れる／行う／調べる／操作する／準備する 等
態度・志向性	協調する／配慮する／参加する／コミュニケーションする／討議する／尋ねる／示す／見せる／助ける／感じる／行う／相談する 等
統合的な学習経験と創造的思考力	統合する／一般化する／公式化する／応用する／適応する／選択する／創造する 等

(出典 日本医学教育学会 2006)



POINT

3



## アクティブ・ラーニング

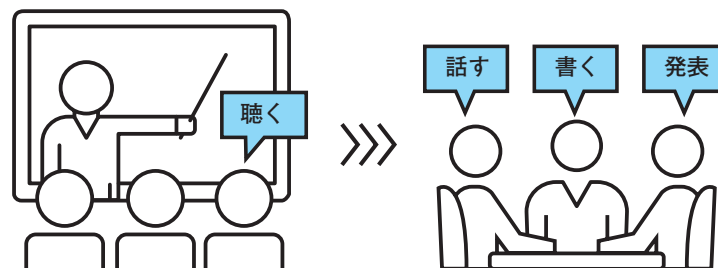
中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」(2012)では、生涯学び続け、主体的に考える人材を育成するため、アクティブ・ラーニング(能動的学習)の必要性が述べられています。

その後の実践や研究を踏まえ、溝上慎一(2014)はアクティブ・ラーニングを次のように定義しています。

一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表などの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。

(溝上慎一「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」2014)

ここで言う「認知プロセス」とは、知覚・記憶や思考(論理的/批判的/創造的思考、推論、判断、意思決定、問題解決など)のプロセスのことです。「認知プロセスの外化」について簡単に言えば、授業を聴いてわかったつもりになっている学生に、授業で習ったことを話させたり書かせたりする、あるいは授業の内容を踏まえて考えたことを発表させたりすることです。学生は自分の理解したことをアウトプットすることで、本当に理解できていたかを確認することができます。言い換えれば、外化することで学生はどこがわからなかったかがわかるのです。



理解のプロセスを外化＝可視化する

↓  
どこがわからないかがわかる(学びのメタ認知)

### 【メタ認知】

自分自身の認知活動あるいは認知特性に対する認知。自分の理解状態をモニターし、何が課題であるか、課題を克服するにはどのように対処したらいいかを考えて遂行すること。たとえば、すぐ忘れやすいという記憶特性を持っていれば、何度でも繰り返して覚えようとするなどである。ただし、自分自身の理解状態を対象化することは簡単ではないので、自分の考えを書いたり話したりして「外化」し、他者の指摘などを活用しながら自分自身の理解状態を吟味する機会を多く設けることが必要になる。

(参考文献 佐伯胖監修『「学び」の認知科学事典』大修館書店)

この定義はアクティブ・ラーニングのミニマムな定義ですが、階段式の大教室で隣の数人と意見交換することもアクティブ・ラーニングとみなすことができるため、格段にアクティブ・ラーニングに取り組みやすくなります。このように、通常の講義とアクティブ・ラーニングを組み合わせたものを「アクティブ・ラーニング型授業(Active Learning Based Instruction)」と呼びます。

これらを参考にして、本学ではアクティブ・ラーニングの定義を以下のように決めました。

以下のいずれかの教育方法を、授業内で1回でも取り入れている授業をアクティブ・ラーニング対応授業とする。

- ①発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習
- ②グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク、プレゼンテーション、振り返り（リフレクション）

この定義に則れば、通常の講義形式の授業の中でもアクティブ・ラーニングのエッセンスを取り入れることは可能です。

なお、アクティブ・ラーニング型授業をより円滑にすすめられるように、一部の教室には可動式の机・椅子を設置しています。

ところで、何のためにアクティブ・ラーニングを導入するのでしょうか。それはひとえに授業の「到達目標」を達成するためです。たとえば、「到達目標」に「○○の知識を活用して□□の問題を多角的に検討できる」とあるとき、授業を聴いているだけでは身につけませんので、グループで考えさせたり、文献に当たったり、独自に情報を収集したりすることが必要になります。「到達目標」とそれを実現する授業手法をマッチさせることが大切です。



POINT

4



## 授業計画 (含む予習・復習の指示と目安時間)

- 「到達目標」が最も効率的に達成できる「順序」で各回の授業内容を組み立ててください。
- 教科書の「目次」の順番に並べるのではなく、「理解しやすい順序」「記憶に残りやすい順序」「身につけやすい順序」で配列してください。

授業の配列には、「原則を述べてから事例に入る」パターンと「事例を考えることを通して原則を学ぶ」パターンとがあります。どちらが効果的かは一義的に決めることはできませんが、学生が理解しやすく習得しやすいパターンを選んでください。

### 【効果的な授業デザインの例】

- ・ 簡単→複雑    ・ 既知→未知    ・ 結論→理由    ・ 個別→一般    ・ 具体→抽象
- ・ 過去 (背景、要因) → 現在 (現状) → 未来 (影響)    ・ 全体→詳細→全体

(栗田佳子、日本教育研究イノベーションセンター『インタラクティブ・ティーチング』2016)

- 大学設置基準では「1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とする」と規定されています。 本学でも原則としてこれと同等の単位数の設定を学則にて定めています。学修の時間には、授業時間だけでなく、予習・復習等授業外での自主学修も含まれます。
- シラバスシステムでは、この学修時間の定めにもとづき、予習・復習の目安時間をデフォルトセット(変更可)しています。(目安時間の編集は可能です。)

2単位の講義・演習科目		
予習 2時間	週1回授業 2時間	復習 2時間
授業1に対して自主学修2の割合		
計6時間		
×		
15回		
90時間の学修		

- 授業外の自主学修を有効に活用すると、教員と学生の双方向性が高まり、学生の理解が深まり、学生の学ぶ意欲が高まる、などの効果が期待できます。次の【具体例】を参考にしてください。

#### 【具体例】

予習		授業		復習
教科書のレジュメの熟読	➡	予習を踏まえた解説	➡	応用問題の解答
資料検索	➡	資料に基づく討議	➡	レポート作成
eラーニング	➡	詳しい解説講義	➡	問題演習

- 予習・復習等授業外での自主学修について指示をする際には、次のことに留意してください。

#### 授業と関連付けてください。

- 授業との関連は「内容」と「活動」の2つの面から考えられます。
- 「内容」では、授業で扱いきれない教科書の内容や、事前に学修してほしい教科書の箇所などを、授業と関連付けて示してください。
- 「活動」では、授業の内容に関係することを調べさせたり、授業で学んだ内容をまとめさせたり、宿題を解かせたり、課題を1人で考えたりグループで検討したりすることが考えられます。
- いずれの場合でも、それらを次の授業の冒頭、あるいは途中で必ず触れてください。折角授業外で勉強したことが次の授業に結びついていないと、学生のモチベーションは大きく低下してしまいます。

#### 到達目標・身につく能力と関連付けてください。

- 予習・復習の指示を「到達目標」や「身につく能力」と関連させ、授業外学修に取り組む意義を示してください。

#### 内容を具体的に指示してください。

- 教科書を予習させる場合は「教科書の○頁～○頁まで予習すること」「予習した内容を箇条書きにまとめてくること」などと、予習の内容や活動を具体的に指示してください。
- また、「予習でまとめた内容は、次回の授業の冒頭で確認します」「箇条書きにした内容をグループで検討します」など、次の授業につながるように示してください。
- 「宿題」や「課題」を出す場合は、「今日の授業で扱った○○について、配付した宿題をやってきてください。次回の授業で答え合わせをします」「○○の課題についてグループで検討し、グループの意見をまとめてきてください。次回の授業で発表してもらいます」「この宿題は今日学んだ○○ということをさらに理解することに役立ちます」「この課題は○○という力をつけることに役立ちます」など、活動と授業の関連を示してください。



POINT

5



## 授業に関する注意事項

- 授業を履修するにあたっての諸注意のほか、課題(試験、レポート等)に対するフィードバックの方法を記入してください。

例：レポートは、コメントを記入し学生へ返却する。  
試験終了後、試験内容の解説を行う。



POINT

6



## 教科書、参考書

- 使用する教科書や参考書を記載してください。実際に使うのか、参考にすればいいのかについても明記してください。購入が必要なものはその旨を記してください。



POINT

7



## 成績評価の基準

- 授業の成績評価基準は「身につく能力」「到達目標」に即して決めてください。
- 選択した評価法について、具体的に何をいつ、どのように測るのかを記載してください。
- P.8の **2 到達目標**を踏まえて記載してください。
- 具体的な評価法として、以下のようなものが考えられます。

評価領域	評価法
知識・理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 客観テスト(多肢選択式、一問一答式、穴埋め式など、解答が一義的に決定できるもの)</li> <li>• 記述式テスト(定義・語句説明、関係説明など、解答の範囲が一定の基準内に収まるもの)</li> </ul>
汎用的技能	<ul style="list-style-type: none"> <li>• パフォーマンス評価(レポートの評価、プレゼンテーション評価など、情報の理解、知識の活用、思考力、判断力、表現力などの観点から分析的に評価できるもの)</li> </ul>
態度・志向性	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ルーブリック評価(態度や行動、興味関心など、観点別に観察評価できるもの)</li> <li>• ポートフォリオ(活動の記録や成果物を蓄積したものを評価の資料とするもの)</li> </ul>
統合的な学習経験と創造的思考力	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 卒業論文、ゼミ論文(学んできたことを統合し、独自の観点から課題に取り組んだ結果を評価するもの)</li> </ul>

# シラバス・チェックリスト

シラバスシステムに入力する際の  
チェックリストとして活用してください。

項目	☑	内容
授業概要		目的の主語が学生になっている
		授業で身につく能力（能力要件）が明確になっている
到達目標		到達目標の主語が学生になっている
		評価可能な到達目標になっている
		1つの文章に1つの到達目標を記述している
		評価の際の条件を具体的に明示している
		到達目標のレベルが適切である
アクティブ・ラーニング		半期15回の授業の中で以下の教育方法を1回でも取り入れている ①発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習 ②グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク、プレゼンテーション、 振り返り（リフレクション）
授業計画		到達目標が効率的に達成できる順序で組み立てられている
		適切な量が設定されている
		予習・授業・復習の関連付けができています
		到達目標・身につく能力と関連付けられている
授業に関する注意事項		課題に対するフィードバックの方法を記入している
成績評価の基準		到達目標と評価基準が対応している
		測定方法を明示している
		測定時期を明示している
		評価基準の比率を明示している
全体		学生の学習を中心に記述している

## 用語集

## 【学士力】

中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」(2008)で示された考え方で、グローバル化の進展と知識基盤社会にあって、学士課程修了時に身につく能力を「学士力」として示した。概要は次のようである。

## 【各専門分野を通じて培う「学士力」(学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針)】

## 1. 知識・理解

専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する。

- (1) 多文化・異文化に関する知識の理解
- (2) 人類の文化・社会と自然に関する知識の理解

## 2. 汎用的技能

知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能

- (1) コミュニケーション・スキル／日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる。
- (2) 数量的スキル／自然や社会的事象について、シンボルを活用して分析し、理解し、表現することができる。
- (3) 情報リテラシー／情報通信技術(ICT)を用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。
- (4) 論理的思考力／情報や知識を、複眼的、論理的に分析し、表現できる。
- (5) 問題解決能力／問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる。

## 3. 態度・志向性

- (1) 自己管理能力…自らを律して行動できる。
- (2) チームワーク・リーダーシップ／他者と協調・協働して行動できる。また、他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できる。
- (3) 倫理観／自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる。
- (4) 市民としての社会的責任／社会の一員としての意識を持ち、義務と権利を適正に行使しつつ、社会の発展のために積極的に関与できる。
- (5) 生涯学習力／卒業後も自律・自立して学習できる。

## 4. 総合的な学習経験と創造的思考力

これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力。

【パフォーマンス評価】……様々な知識やスキルを応用・総合しつつ何らかの実演・実行を求める課題をルーブリック等で評価すること。具体的には、レポートや新聞といった完成作品や、プレゼンテーションなどの実技・実演の評価。

【ルーブリック】……学修到達度を示す評価基準を一つ以上の観点と一つ以上の尺度からなる表として示したものであり、パフォーマンス課題を評価するために使われる。

【レポート評価のルーブリックの例】

課題と到達度	満たしている (4点)	改善点がある (3点)	不十分である (2点)	満たしていない (0点)
①情報分析 資料内容の理解	資料をふまえた現状が指摘されている。		資料の引用が不十分である。／現状の指摘が不十分である。	資料を全く踏まえていない。／現状が指摘されていない。
②課題発見 課題の指摘	課題が指摘されている。	課題があいまいである。	課題がずれている。	課題が書かれていない。
③構想 解決策の提示	適切な解決策が提示されている。	解決策が提示されているが説得力や適切性に欠けている。	解決策が提示されているもののずれている。	解決策が提示されていない。
④表現 構想・論理展開	根拠が正当なものであり、意見との整合性もあり、説得力がある。①と②が主張の根拠として適切に機能している。	根拠が正当なものであるが、説明が未熟であり、説得力が弱い。または①と②が主張の根拠として説得力が弱い。	根拠の正当性が弱い。主観的な面が強い。または①と②が根拠としてずれている。	根拠が書かれていない。

【ポートフォリオ】……ポートフォリオとは、もともと書類入れやファイルを意味しているが、学習の評価方法として、近年注目されており、たとえば「学習活動において児童生徒が作成した作文、レポート、作品、テスト、活動の様子が分かる写真やVTRなどをファイルに入れて保存する方法」(グロワード、1999、p.8)と定義されている。ポートフォリオは、単なる記録ではなく、学習者自身が残す意味があるものを選んでファイルすることを通して、1)子どもが達成したことが何であるかを子ども自身に明確に伝え、2)どうしてそれが高く評価されることなのかをわからせ、3)子どもの達成感や自尊心、あるいは自己効力感を高め、そして4)次の課題が何であることを示して自分の学習活動をコントロールするためのメタ認知を育てることを意図するものである。



明治学院大学

# シラバス執筆ガイド

Syllabus Creation Guidelines